

8月のことば 教育 ～「考える①」

お盆は、亡くなった家族の事を思い出す。「孝」という字が進化して「考」という文字はできた。誰しも父が亡くなると、真剣に「親孝行の意味」と「いかに生くべきか」を考える。人は生まれて三年間は親に世話してもらわねば生きていけず、その親が死んで三年間は“孝”の意味を考えることとなっている。

それが“喪に服す”という事である。つまり、物事を心の深層で推敲し、答えを導き出すことを「考える」というのである。

————— * ————— * —————

然るに今の社会を鑑みると真に考える場面の少ない事に気づく。まず教育の場で、点数化しやすいものを評価する傾向があり、暗記や方程式を解く能力のあるものをエリートと称賛する。しかし、真のエリートとは暗記したことや方程式を使って物事を深く考えて皆の為に先頭に立つ人の事をいう。

又、仕事の場では、打ち合わせや会議が種々行なわれるものの、それは単なる情報の転送に終始しているのではないか？と思われる。真の会議とは、持ち寄った資料や情報を整理・吟味し、深く考えて方策を見出さねばならない。「考える」為には、物（事）を見て触れ五感で感じて思う。想像力が必要である。

「考える」とはこの想像した事の上に様々な情報を照らし合わせ、その物や事の法則や意外性を見つけ、自らの心で判断することである。

インターネットでいきなりその物事のボタンを押し、抽出した資料を持ってくるのは勉強にあらず。

高度な研究結果と称されるものが単なる情報の寄せ集めであったり、選挙がメール情報でなされてメールで投票できるようになると、未恐ろしい社会が出現するであろう。

風鈴に涼しさを感じる夏。静寂の中に…私達は真に物事を感じ考えているのか？又は、考えることのできる人をつくる教育を行なっているのか？を問う必要があります。

(*ちなみに、母が死んで深く考えることを「妣^ひ」という。)